慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Susan Hillとghost story
Sub Title	Susan Hill and ghost story
Author	河内, 恵子(Kawachi, Keiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1988
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.52, (1988. 1) ,p.185- 161
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岩崎英二郎教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00520001-0227

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Susan Hill と Ghost Story

河内恵子

はじめに

> I have done with novels. I gave them up seven years ago and I have absolutely no intention of returning to them, and no more desire to do so than I have of smoking a cigarette again. Prose fiction of any kind is a chapter of my life closed, as it were, for all manner of reasons I won't go into here.[1)]

「小説はもう書かない」と Susan Hill が語ったのは 1981 年のことであるが，その 2 年後の 1983 年に，彼女は *The Woman in Black* を発表した。1974 年に *In the Springtime of the Year* を上梓して以来，実に 9 年ぶりに "full-length novel"[2)] を執筆したことになる。「Prose fiction を創作する時期は，私の人生においては，もう終ったのだ」と言明した Hill にふたたび fiction を書かせた要因は一体何だったのか。しかも，彼女がそれまでの創作活動で一度も体験したことのない ghost story というジャンルに，この作家を向かわせた力はどこから生じてきたのか。

The Woman in Black が発表された 1983 年に Susan Hill 編集の *Ghost Stories* が Hamish Hamilton 社から出版された。この選集には Hill 自身が名作として選んだ 13 編の ghost story が収められており，その "Introduction" において編者は，独自の ghost story 論を具体的に展開している。

Hill は 'traditional, classic English ghost story' は 'traditional, classic English detective story' と同様に 19 世紀にその源を発すると考えてい

る。当然のことながら，ghost story や detective story の発生は19世紀をさかのぼることはるか昔の神話や伝説に求められるが，両者が‘traditional’で‘classic’なジャンルとしてイギリス文学に定着したのは，19世紀，ヴィクトリア朝時代においてである。しかし，‘traditional, classic English detective story’が才能ある作家と熱意にあふれた読者の真摯な努力によって現代においてもなおその繁栄を誇っているのに対して，‘traditional, classic English ghost story’は凋落の一途を辿っている，と Hill は嘆く。そして，この凋落の原因として，とりわけ1930年代以降ほんものの ghost story がほとんど出現しなくなった原因として彼女は，‘tale of terror and horror’の隆盛を挙げている。読者の恐怖心を徒にかきたてるために執拗に繰り返される残酷で血なまぐさい描写は，時代とともにその程度を増し，現在では，あまりにも醜悪なため，ほとんど滑稽にさえ映ると彼女は鋭く指摘している。

イギリス文学における重要なジャンルである‘classic ghost story’の真髄を伝え，その復権を成就させるという意図の下に *Ghost Stories* は編まれた。Victoria 朝時代から現代に到るまで夥しい数の ghost story が書かれてきたが，その巨大な作品群からどれを選ぶかという問題に答えることは，当然のことながら，‘classic ghost story’に対する編者自身の独自の定義を示すことになる。

Hill は‘ghost story’と‘tale of terror and horror’とを明確に区別することからその仕事を始めている。

> What did I rigorously exclude? Anything to do with werewolves, witches, vampires and monsters; anything science-fictional or about fantasy other-worlds inhabited by alien beings, however wraith-like their mere appearance might be; anything involving frightening occurrences which were bizarre, odd, inexplicable, in any ordinary, human terms, and yet which did not, apparently, involve ‘ghosts’ or, at least, ghostly phenomena.[3)]

Ghost story は狼人間や魔女が暗躍する世界を描く物語であってはなら

ない。また，異星の生物を扱った科学小説であってもならない。このように“ghost story”を“tale of terror and horror”から綿密に区別することを ghost story 論の主軸として作品集を編んでいる編者としては Susan Hill のほかに J. A. Cuddon がいる[4]。しかし，Cuddon の ghost story に対する定義付け及び条件付けがここで終っているのに対し，Hill は‘ghost story’が‘classic’で‘traditional’であるための条件をさらにいくつか挙げている。まず *understatement*. “Classic ghost story”を書く作家の技は *omission* and *suggestion* にあるとし，あまりにも明瞭単純な描写や誇張は避けなければならないと彼女は指摘している。次に，読者の恐怖心を喚起するためには，“ghost story”の源が現実世界に，読者が知覚し，実際に生活している時空に，なければならないとしている。また，「ghost は存在するかもしれない。いや，ghost は存在するのだ。存在しているに違いない」といった読者のさまざまな心の動きに巧みに触れる世界が描かれていなければならないと Hill は述べている。そしてこれらの条件を満たすことによって‘classic ghost story’writer が伝えるものは *atmosphere* である。

> The ghost story must impart a strong sense of place, of mood, of the season, of the elements, and so the traditional, haunted settings—old isolated houses, lonely churchyards, castles and convents and empty, narrow streets at night—are heavily relied upon.[5]

条件付けは続く。

とにかく ghost が登場しなければならない。実際に姿を現わさなくとも，人間の五感のどれかに確実にその存在を伝える ghost が登場しなければならない。しかし，アルコールや薬物が ghost との出会いを可能にしている場合はその ghost story を‘classic’と認めることはできない。

Susan Hill が提示した条件は厳しいがそれらは決して独断的な見解ではない。Hill 編集の *Ghost Stories* が出版された 1983 年に，ghost stories の研究家として名高い Jack Sullivan が *Lost Souls, A Collection of English*

Ghost Stories を公けにしたが，その詳細な序文において彼が披瀝している，ghost story であるための条件は Hill が指摘した条件とかなりの部分で重なっている[6]。

Sullivan もまた ghost story においては 'atmosphere' が 'plot' よりも重要だと説き，この 'atmosphere' を創り出す手法として，'understatement', 'irony', 'credibility in point of view', 'narrative distance' を挙げている。そして，彼も，ghost story がイギリス文学において定着したのは Victoria 朝時代であったと結論を下している。しかし，Sullivan の論には Hill のそれに見られるような 'classic English ghost story' の衰退を嘆く姿勢は全く存在しない。むしろ，20 世紀末の現代に到るまで途絶えることなく受け継がれてきた ghost story というひとつの伝統を高く評価し賛美している。Gothic novels と ghost story との相違を，作品に内包される 'subtlety' の有無に求めてはいるものの，'tale of terror and horror' の脅威に喘ぐ ghost story といった事情には一切言及していない。この姿勢はまた，前述の J. A. Cuddon の姿勢でもある。Cuddon は ghost story と 'tale of terror and horror' を明確に区別はしているものの，前者が後者によってその力を減退させられてしまっているなどとは考えずに，表面的にはさまざまに形を変えながらも，現代に到るまで脈々と継承され，読者の関心を強く捉えて離さない ghost story の魅力に全面的に屈服している。

Ghost story の anthology としては最も新しい，*The Oxford Book of English Ghost Stories* の編者，Michael Cox と R. A. Gilbert もまた Introduction において，science fiction や crude horror によって多少その人気に影が見られることは認めつつも，ghost story の長く強い伝統を 20 世紀末の現代にも求め，その強い生命力を高く評価している。Ghost story の生命の証しを認めこそすれ，その弱体化を嘆いてなどいないのである。

Susan Hill の非観主義（ペシミズム）は何に由来するのだろうか。批評家や研究者としての立場からではなく，現場の作家としての立脚点から考察した場合，やはり，英国の 'traditional and classic ghost story' の真髄は失われつつあ

ると結論を下さざるをえないのだろうか。Hill が独自の ghost story 集を編み，自ら ghost story を書き上げた動機の根底には，この危機感があったに違いない。ほんものの ghost stories を紹介するという消極的・間接的手段及びほんものの ghost story を自らが創作するという，積極的・直接的手段の両者を武器に Hill は，Victoria 朝に基盤を有する‘classic ghost story’を 20 世紀末の現代に復活させるという戦いを果敢に戦っているのではないだろうか。

Jack Sullivan, J. A. Cuddon, Michael Cox & R. A. Gilbert が Susan Hill と相前後して ghost stories の anthology を編集していることは，すでに述べたとおりであるが，彼らの手による anthology と Hill のそれとの間にはひとつの大きな相違がある。すなわち，彼らが ghost story の系譜を忠実に辿り，その当然の帰結として，現代作家の作品をその anthology に加えているのに対し，Hill はほとんどの作品を Victoria 朝時代に求めているのである。Thomas Hardy の短編集を編さんし，Charles Dickens の小説をこよなく愛する Hill が Victoria 朝時代の文学に精通しており，それ故に，この時代から多くの作品を選択しているのは至極当然な成り行きかもしれない。たしかに，彼女は Victoria 朝以降の新しい時代の作家や現代作家による ghost stories をも研究し，それらのいくつかを高く評価してさえいるのだ[7]。しかし，いざ anthology をまとめるという段階になると，編者の心を占めるのは，やはり，Victoria 朝時代の ghost stories なのである。そして彼女自身の創作による *The Woman in Black* もまた‘Victorian ghost-story’なのである。

新しい時代の要求に応じた ghost stories が新しい作家たちによって執筆されている。新しい時代の新しい読者たちがこれらの作品を熱心に読んでいる。この現実が，Sullivan や Cox といった編者たちをして「ghost story の伝統は生き続けている」と楽観的に断言させているのであろう。しかし，新しい時代の新しい読者たちは，過去の名作を，Victoria 朝時代の ghost stories をそれほど読まなくなっている。このもうひとつの現実が Susan Hill をして「ghost story の人気は凋落している」と呟かせてい

るのであろう。

Victoria 朝文学は脚光を浴び続けている。Thomas Hardy, Charles Dickens, George Eliot といった great novelists に関する研究はさかんに行われている。しかし，Victorian ghost stories についての研究も同様にさかんに行われているかというと，決してそうではない。だが，ghost story というこのジャンルが，華麗な Victorian literature を支える重要な支柱のひとつであることに間違いはない。この重要な支柱を見落すことがあっては，それこそ，Victorian literature 全体を，いやそればかりではなく the Victrian Age そのものを正確に把握することができなくなるのではないだろうか。ここに Susan Hill が抱いた悲観論や危機感の根幹があるのではないだろうか。この非観論や危機感を克服するために，彼女は「Victoria 朝時代」を読み，「Victoria 朝時代」を書くのである。

I *Ghost Stories* selected by Susan Hill

> In a sense, every story is included here both for itself, and because it is a representative of many others. None of them is obscure, none has been dug out of long-lost Victorian periodicals, all are by well-known authors. What I wanted to assemble was simply a selection of the very best—best imagined, best written, best constructed—of a minor yet unjustly neglected English literary form.[8)]

1. *Keeping His Promise* by Algernon Blackwood (1869–1951)

Edinburgh University で医学を学ぶ Marriott が試験を翌日にひかえて猛勉強をしているところへ子供時代の友人 Field が突然訪れる。夜遅く，しかも雨が降る中を，何の予告もなく昔の友人に会いにやってきた Field は疲れきった様子でひとことも言葉を発しない。七年ぶりに出会った友人を目の前にして Marriott は優しい心遣いを見せる。試験勉強のことを気にしながらも，疲労の極致にある Field を下宿部屋に招き入れ，食事の世話をやき，相手が眠気におそわれているのを知るや自らのベッドを

も提供する。Marriott が用意した食事をむさぼるように食する間も Field は無言のままである。友人の気を引き立てようと喋り続ける Marriott の声だけがむなしく響く。

Field の穏やかな寝息を聴きながら，Marriott は勉強に打ち込み，ふと気がつくと，朝になっている。友人の眠る部屋をのぞきこんだ Marriott は驚きで言葉も出ない。Field の姿が消えているのだ。しかし，静かな，穏やかな寝息は確かに聴こえてくる。徹夜の勉強で神経が参っているのかもしれないと，Marriott は，心身を目覚めさせるために早朝の街へと散歩に出かけるが，帰宅した彼を待っているのは，大学の友人 Greene である。そして，例の寝息は依然として Marriott の聴覚を悩ませる。だが，Greene もまた，この規則正しい呼吸を確かに聴いていると知って Marriott は安心する。そして，昨夜以来痛みを感じていた腕から血が流れ出ているのを見てようやく思い出すのである。七年前，校庭で Marriott と Field は約束をしたのだった。どちらかが先にこの世を去る時は必ず相手に知らせようと。その友情と約束の証に二人はお互いの腕をナイフで傷つけ，血を交わせたのだった。

一週間後，Field の姉妹からの手紙で，Marriott は，Field が放蕩の果て，父親から勘当され，自らの命を断ったことを知る。放蕩の旅には出ずず，自宅の地下室に身をかくした Field は静かに死を待っていたらしい。死因は飢えだった。死亡推定時刻は Field が Marriott を訪れた時と一致していた。「血の盟約」を守るために Field の ghost が旧友に会いにやってきたのだった。

"Marriott was in every sense an ordinary man"——気の良い青年の生活を乱す ghost の出現は，主人公が平凡な一学生であるゆえに尚更無気味に，強い現実性をもって読者に恐怖を突きつけてくる。Greene という第三者にも ghost と出会わせることによって，作者は ghost の存在の信憑性を巧みに伝えている。ghost を共通に体験する複数の人物の存在は，強い説得力を作品に与える。

下宿部屋があるアパートの階段を登ってくる靴音を耳にした時から，"a

queer sensation of fear. . . faintness and a shiver" が Marriott の体を走る。そして，時間の経過と共に徐々に鋭さを増してくる腕の痛み。これら二つの感覚は繰り返し書かれているために微妙な皮膚感覚として読者に伝わってくる。そして，耳に聴こえてくる穏やかな寝息。Marriott の，そして，読者の皮膚感覚と聴覚が ghost の存在を確実に捉えてゆく。

古い Edinburgh の街。石畳の路上を走る馬車の音，雨にかすむ風景。下宿屋アパートの石の階段。'atmosphere' が創り出され，伝えられる。

あの朝，Marriott は Greene と共に下宿部屋から逃げ出した。あの "silent breathing" はまだ続いているのだろうか。

2. *The Demon Lover* by Elizabeth Bowen (1899-1973)

疎開先の郊外の住居からロンドンの家に必要な荷物を取りにきた Mrs Drover は，テーブルの上に彼女宛の一通の手紙を発見する。

> Dear Kathleen,
>
> You will not have forgotten that to-day is our anniversary, and the day we said. The years have gone by at once slowly and fast. In view of the fact that nothing has changed, *I shall rely upon you to keep your promise.* I was sorry to see you leave London, but was satisfied that you would be back in time. You may expect me, therefore, *at the hour arranged.*
>
> (Italics mine) Until then. . .
>
> K.[9]

日付けは「今日」になっている。差し出し人の K. とは誰か。「約束」とは何か。そして，取り決めた時間とは。さまざまな疑問が押し寄せてくる混乱の中で Kathleen Drover は 25 年前の夏を思い出す。1916 年 8 月，彼女は戦地へ赴く婚約者と別れたのだった。不思議な強い吸引力を持っていたあの人物が戻ってきたのだろうか。戦死したと思われていたが生きていたのだろうか。そして 25 年も昔に交わした約束を果たすために Kathleen に会いにやって来るのだろうか。過去を思い出すごとに新しい恐怖が生じ

てくる。

隣近所の人たちもみなロンドンを離れているために，奇妙な静寂が家の内と外とを支配している。Mrs Drover は大急ぎで荷物を取りまとめる。なにものかに観察されているような無気味さを体全体で感じながらも，主婦であり母である彼女は，家庭生活に必要な物を荷造りする。早く用事を済ませてこの家から外へ出たいという切迫した希求が読者に伝わってくるる。これは誰かが仕組んだ罠なのか。それともほんとうにあの人が25年間の空白を埋めるために出現するのか。緊張した atmosphere を描き出しながら，それと平行して，作者は Mrs Drover が3人の子供を持つ44歳の平凡な主婦であることを読者に教える。

眼に見えぬ恐怖から逃げ出すように Kathleen はタクシーを呼び止める。行き先を告げる前に動き出すタクシー。振り向いた運転手の顔を見て Kathleen は悲鳴をあげるが，恐怖に満ちているだろうその声は誰にも届かない。Kathleen を乗せたタクシーはどこへ向かって走り去ったのだろうか。

空襲を受け傷ついた大都会ロンドンの静けさと住む人のいない家の静けさとが，濃厚な淋しさを包み込む atmosphere となっている。約束をはたすために訪れた手紙の書き手は，25年前に Kathleen に語った。

> (Kathleen said) 'You're going away such a long way.'
> 'Not so far as you think.'
> 'I don't understand?'
> 'You don't have to,' he said. 'You will. You know what we said.'
> 'But that was—suppose you—I mean, suppose.'
> 'I shall be with you,' he said, 'sooner or later. You won't forget that. You need do nothing but wait.'[10]

若き日の Kathleen の婚約者はフランス戦線で戦っている兵士であったが，彼のその眼に，彼女は 'special glitters' を見たと思っていた。そして彼の持つ呪縛力。そして謎めいていて，しかも確信に満ちた別離の言葉。25年前の K. はその時もうすでに ghost だったのだろうか。

第一次世界大戦と第二次世界大戦とを二本の時間軸として描かれるこの ghost story の主題は，*Keeping His Promise* と同様，「約束」である。微妙に伝えられる atmosphere を支えているのは，Bowen の抑制のきいた語り口 understatement である。Victorian ghost story を主として選択している Hill ですら 20 世紀の ghost story の傑作，*The Demon Lover* が備えている 'classic ghost story' としての特質を無視することはできなかった。

3. *The Man With The Nose* by Rohda Broughton (1840-1920)

Mrs Drover は London の街の彼方にタクシーで連れ去られてしまったが，この story の主人公 Elizabeth はスイスの Lucerne のホテルから，馬車で何処へと連れ去られてしまう。新婚旅行の途中で，しかも夫が重要な仕事でイギリスに戻っている間に妻は忽然とその姿を消してしまったのである。この story は 20 年ものあいだ，Elizabeth を探し続けている夫が語る一人称形式の narrative form を取っている。(前述の二作品は三人称形式で書かれていた)

Story の導入部は非常に明るく，結婚を間近かに控えた若い男女の弾んだ気持ちが，ユーモアをたっぷりと含んだ会話によって描かれている。しかし，新婚旅行の目的地をあれこれと話し合っている時に，Elizabeth の幼少時代の暗い記憶が明らかにされてくる。彼女は，湖水地方の Ulleswater で催眠術をかけられたことがあったのだ。催眠術者の命令通りに動いたらしいが，その記憶はない。ただ五週間ばかり寝込んでしまい，その間，さまざまな戯事を口走っていたらしい。この時の体験のため彼女は湖水地方への旅行を嫌がったのである。しかし，湖水地方から遠く離れてはいても，そして人生の幸福の絶頂期にあっても，Elizabeth の心の奥底には恐怖が厳として存在している。

> 'I try to think about it as little as possible ; but sometimes, in the dead black of the night, when God seems a long way off, and the devil near, it comes back to me so strongly—I feel, do not you

know, as if he were *there* somewhere in the room, and I *must* get up and follow him.'[11]

ヨーロッパへ旅に出た二人ではあるが，Elizabeth は行く先々で誰かに観察されていると感じ，その恐怖心のため夢にうなされるようにもなる。しかし，彼女の恐怖が幻覚によるものではないことは複数の人物がこの不思議な男 "a very tall and dark gentleman with a most peculiar nose—not quite like any nose that I ever saw before—and most singular eye" を目撃するという事実によって証明されている。そしてこの男に Elizabeth は連れ去られてしまうのである。男はあの催眠術師なのだろうか。神に挑戦する悪魔なのだろうか。それとも湖の周辺に出没する ghost なのだろうか。Ulleswater も Lucerne も湖水の地である。「目立つ鼻」という形容辞は滑稽であるとともに妙な現実味を伴った表現である。

4. *The Dream Woman* by Wilkie Collins (1824-89)

Elizabeth は自分がいつしか男に連れ去られてしまい助けを求めても誰も来てはくれないという悲しい悪夢を見たことがあったが *The Dream Woman* の主人公の Isaac Scatchard も悪夢に苦しみ続けている。Isaac が旅先で見た夢は "a fair, fine woman, with yellowish flaxen hair and light grey eyes, with a droop in the left eyelid" に就寝中にナイフで襲われるというものだった。しかも，彼はこの夢を彼自身の誕生日の朝に見たのだった。水曜日の午前二時。日付ばかりではなく曜日と時刻さえ一致していた。

Isaac は美しい Rebecca Murdoch と偶然知り合い結婚するが，この Rebecca こそ例の "dream woman" とその姿形が生きうつしだったのである。母の忠告にも聞き従わず Rebecca を妻にした Isaac ではあったが，夫婦は次第にお互いの性格や生き方を非難し合うようになり，ついには憎悪を感じるようになる。そして Isaac の誕生日に妻は夫を殺害しようとする。ナイフを振りかざして襲いかかってくる Rebecca の姿は夢の中の女に違いなかった。夢による予告があったからこそ自らの危機を事前に察知し

て Isaac は一命をとりとめる。しかし，この事件以来姿を消した Rebecca に彼はずっと悩まされているのである。Rebecca はいつ戻ってくるやもしれないのだから。

夢にうなされる Isaac の境遇を語るのは彼の雇い主であるが，その雇い主から話を引き出したのは医者である語り手の "I" である。二重構造の narrative form が story に奇妙な真実性を与えているが，これは，事件の当事者を冷厳に見つめ，距離を保って語る語り手の客観性のためではないだろうか。"Dream woman" はほんとうに Rebecca なのか。そして Rebecca は Isaac に憎悪を抱いたままこれからも彼の夢の中に現われ続ける ghost なのだろうか。

5. *The Signal-Man* by Charles Dickens (1812-70)

Isaac は自分自身が殺害される夢を見て，常に用心深く心の準備を整えていた。しかし，"signal-man" が目撃した ghost は何が起きるのか彼に教えてはくれない。ただ，片腕で眼をおおい，もう一方の腕を振り回しながら "Below there! Look out! Look out!" と彼に呼び掛けるだけである。ただ何か悲惨な事件が起こることだけは確実なのだ。というのも，この ghost が出現したその後に，恐ろしい鉄道事故が起きたという事実があり，"signal-man" はその眼で二度にわたって ghost の出現とその後の大惨事を目撃していたのである。今再び現われた ghost は如何なる事故を予告しているのだろうか。

この story の語り手であり，"signal-man" の相談相手になっていた "I" は "signal-man" が轢死したことを知り驚愕するがするが，"signal-man" を轢いた列車の操縦士が次のように語るのを聞い全てを悟る。

> 'I said, *Below there*! *Look out*! *Look out*! For God's sake clear the way!'. . . '. . . I never left off calling to him. *I put this arm before my eyes, not to see, and I waved this arm to the last*; but it was no use.'[12] (Italics mine)

巧みな構成力を持つこの作品が何よりも強く伝えるのは "signal-man"

の孤独な姿である。暗い口を開けたトンネル，眼前にそそり立つ崖，そして日毎繰り返される単純きわまりない仕事。そして，この孤独を尚一層鮮やかに浮かび上がらせるかのように登場するのが悲しげな ghost であった。

6. *The Old Nurse's Story* by *Elizabeth Gaskell* (1810-65)

両親を失った幼い少女 Rosamond とうら若い nurse の Hester は Rosamond の母方の親類の屋敷，Furnivall Manor House に到着する。広大な屋敷についての細部に到るまでの描写は ghost story のための atmosphere を十二分に伝えている。屋敷は丘陵地帯の麓にあり，その屋敷の東側の部分は閉じられたままである。

屋敷の女主人 Miss Furnivall は耳の不自由な老婦人であるが，彼女の過去には何か秘密がかくされているらしい。

外の世界と屋敷とを断絶するかのように立ちはだかる丘に雪が降り積もった時，Rosamond の姿が消えた。それまでにも，屋敷内のオルガンが突然鳴り響くといったような奇怪な事件はあったが，Rosamond の天真爛漫な言動が Hester を励まし，Furnivall Manor House の住人たちの生活を明るくしていた。その Rosamond がいなくなった。Hester が教会での礼拝に参列していた日曜日の午後に突然その姿を消してしまったのである。誰かが連れ去ったのであろうか。もしそうだとすれば，それは神に挑戦する仕業ではないのか。神に祈りを捧げる日に悪業を行うとは。

羊飼いが丘で Rosamond を無事に発見するが，この事件を契機に Hester は Furnivall Manor House にまつわる秘密を徐々に暴いてゆく。

Miss Furnivall の姉 Maude は屋敷に出入りしていた外国人の音楽家と極秘に結婚し女の子を出産したが，この音楽家を姉同様に愛していた妹の Grace (現在の Miss Furnivall) は嫉妬のあまり父に姉の秘密をもらしてしまう。気位の高い父は，名門の名を汚した Maude の所業を知り，怒りのあまり激情に駆られて Maude の娘を杖で打ちすえてしまう。Maude は実の娘をお気に入りの農夫の娘と偽って屋敷の東側の部分に自分と共に住まわせていたのだった。深い傷を負った娘と母は雪の降る夜屋敷を追い

出され，丘をさまよい歩いた末凍死してしまったのだった。

Rosamond を誘い出したのはこの少女だった。屋敷の窓を外から叩いて「中に入れて」と訴えるこの子供の ghost には言い知れぬ孤独感が漂っている。オルガンを奏でていたのは無類の音楽好きであった Lord Furnivall だった。娘と孫娘を凍死させた彼の魂が平安の眠りに就くことなどありえないのだ。

三人の ghost が現われて Miss Furnivall の目前で過去の不幸な事件を再現した時，彼女は倒れてしまう。そして "Alas! alas! What is done in youth can never be undone in age! What is done in youth can never be undone in age" と最後につぶやいて息を引きとる。復讐のために現われた Maud はその目的を果たしたことになるが，何故，もっと早い時点で妹に対する憎悪を爆発させなかったのだろうか。Maud は子供の出現を待っていたのだ。Grace が愛するようになる幼き子が屋敷に現われるのをじっと待っていたのだ。それゆえにこそ，明るい Rosamond に Grace が慰めを見い出し始めた時，彼女から Rosamond を取り上げようとしたのだ。Maud とその娘の姿を見て Rosamond は叫ぶ。" It's the lady! The lady below the holly-trees; and my little girl is with her, Hester, Hester! Let me go to her; they are drawing me to them. I feel them, feel them. I must go."[13] 母も姉妹もない Rosamond を強く惹きつける母と娘の悪の力こそは，母と娘の強い愛情を逆説的に証明しているかのようである。Rosamond を渾身の力で抱きとめて ghost から彼女を守り抜いたのは Hester だった。

Rosamond の子供たちに年老いた Hester が昔話を語って聞かせるという narrative form は Rosamond の現代の幸福を裏付けているようで読者に安心感を与える。

7. *Sir Edmund Orme* by Henry James (1843-1916)

Sir Edmund Orme も復讐のために Mrs Marden の前に出現する。婚約者であった Sir Edmund Orme と別れ Captain Marden の妻となった

女主人公は婚約解消を苦にして自殺した Edmund の ghost に夫の死後，不定期的にではあるが，つきまとわれている。沈黙を続ける ghost は Mrs Marden の一人娘 Charlotte の言動を観察しているようであるが，彼の姿は Mrs Marden 以外の人には見えない。ところが Charlotte を真剣に愛するようになった語り手の "I" には Sir Edmund Orme がはっきりと見えるのである。Mrs Marden と "I" は ghost を知るという重い体験を二人で分かち合うことになるが，この "perfect presence"[14] の出現の意図は一体何なのか。Charlotte が "I" を婚約者として受け入れた時，以前から衰弱し始めていた Mrs Marden は "I" と Charlotte とそして "perfect presence" に見守れて息を引き取る。この後 Sir Edmund Orme も姿を現わさなくなる。しかし，この story の導入部を読み返してみると，"I" と Charlotte が必ずしも幸福に長らえたとは思われない。"I" が narrator となっている story が書き残されている原稿の所有者となったもうひとりの narrator "I" が冒頭で語っている。"The statement appears to have been written, though the fragment is undated, long after the death of his wife, whom I take to have been one of the persons referred to. . .(she died in a childbirth a year after her marriage), . . ."[15] Sir Edmund Orme の悪意に満ちた復讐心が無気味に暗示されている。

8. '*Oh, Whistle, And I'll Come to You, My Lad*' by M.R. James (1862-1936)

Professor Parkins は休暇を楽しむ為に Burnstow にやって来るが，ここの浜辺で奇妙な笛を見つける。ホテルの自室で笛を吹いた Parkins は笛を吹くという行為によって，なにものかを部屋に招き入れるという誤ちを犯してしまう。笛を吹いた後，覚醒した状態で彼が見る夢——あるいは vision——は暗示的である。長く続く砂浜を一人の男が走ってくる。疲れ切った様子で，しかもなにものかに脅えているらしく，男は必死に，障害物を乗り越えてもっと先へ行こうとするがとうとう倒れてしまう。そのはるか後方から，なにものかが驚くべき速度で追って来る。青白くはためく

衣に身を包んだそれは，立ち止まったり，砂浜に向かってその身をかがめたりと不規則な行動を繰り返しつつ，男に迫ってくる。そして——Professor Parkins はここで眼を開けてしまう。これ以上見続けることができないのだ。この夢や，夜海岸に佇む男や，ghost を見たと言って震えている子供を描くことで作者は atmosphere を創りあげ climax へと story を展開させてゆく。Professor Parkins の部屋に入り込んできた「白いシーツ」のようなものは，呼び笛の音に応えてやってきた ghost だったのだろうか。呼び笛を自然界に返せば全ては解決するのだろうか。

9. '*They*' by Rudyard Kipling (1865-1936)

盲目の婦人が美しい庭のある屋敷で多くの子供たちに囲まれて暮らしている。この地にたまたまやってきた "I" は婦人と子供たちと屋敷に強く惹かれるが，子供たちが ghost であることを知るようになる。盲目の婦人は子供を生んだこともなければもちろん失ったこともないが，子供が好きだからという理由で，屋敷を子供たちのために整えていた。美しい屋敷をこの世の天国のように設えていたのである。すると，子供たちが，いや正確に言うならば，子供たちの ghost がやって来たのだ。"I" は子供をもち，そして子供を失ったことがあるのであろう。"I" は，自らの子の存在をこの屋敷で感じる。抑制のきいた表現が，盲目の女と "I" の苦しみと幸福を微妙に表現している。子供たちの笑いさざめく声，見え隠れするその姿。子供の習性をみごとに捉えた表現が，とかく sentimentalism に陥りやすい主題を，透明度の高い ghost story へと昇華させている。

> The little brushing kiss fell in the centre of my palm—as a gift on which the fingers were, once expected to close : as the all-faithful half-reproachful signal of a waiting child not used to neglect even when grown-ups were busiest—a fragment of the mute code devised very long ago.
>
> *Then I knew.*
>
> . . . .

'Now, you understand,' she whispered, across the packed shadows.

'Yes, I understand—now. Thank you.'

'I—I only hear them.' She bowed her head in her hands. 'I have no right, you know—no other right, *I have neither borne nor lost*!'

'*Be glad then*,' said I, for my soul was torn open within me.

'Forgive me!'

She was still, and *I went back to my sorrow and my joy*.[16] (Italics mine)

10. *Green Tea* by J. S. Le Fanu (1814-73)

Medical philosopher である Dr Hesselius が "I" として，The Rev. Mr. Jennings に起こった悲劇的な事件について語っている。勤勉で，寛大で，しかも深い知識と洗練された所作を我がものとしていた Mr. Jennings は London でも彼の教区の Kenlis でも多くの人々の信頼を勝ち得ていた。しかし，彼は ghost にとりつかれていたのである。他の人の目には映らない猿の形をした ghost に始終観察されつけまわされていたのである。Mr. Jennings は "Religious metaphysics of the ancients" を四年前から研究し始めていたが，この異教研究という学問を媒体にして Satan が彼を支配し始めたらしい。神が下したもうた罰なのかもしれない。しかし，学問も祈りもあの猿を連れ去ってはくれない。むしろ猿は日に日にその狂暴性を増し Mr Jennings に自殺を強要するほどまでになってしまった。Narrator "I" である Dr Hesselius は Mr Jennings 本人から詳しい事情を聞き，また彼の周辺の人々からさまざまな情報を集めて，Mr. Jennings の存在自体を危くしているのは，彼が飲み続けてきた green tea が原因となっているところの幻覚だと判断を下す。しかし，この判断を Dr Hesselius から聞く前に，牧師は自らの命を断ってしまう。

キリスト教と異教，神と悪魔，科学と神秘思想といったさまざまな対立概念の中に，狂暴な悪の力として猿を登場させることによって，Le Fanu

は story に無気味で，原始的な破壊力を導入している。猿の正体が明らかにされないままに不幸な結末が用意されており，読者は中途半端な位置に不安な気持ちで置き去りにされてしまう。

11. *The White Cat of Drumgunniol* by J. S. Le Fanu

Ireland の Drumgunniol で何世代にもわたって農業や牧蓄業に携わってきた Donovan 家の人々は各々その死の直前に白い猫か，あるいはまた白い衣服に身を包んだ女を目撃する。これらの死の使者にひとたび出会ったからには，誰もその過酷な運命から逃れることはできない。

死を予告する女や猫を Susan Hill は ghost ととらえている。*Green Tea* における monkey と同様死の世界への案内役としての役割を担っている存在を ghost と考えているのである。

この story の記録者は，Donovan 家の若き子孫から直接聞いた話をありのままに書き留めたと記している。そしてこの語り手 Dan Donovan は Dublin の Trinity College で学んだ知識人であり，自らの家に伝わる奇怪な伝説を冷静に語るという役割をはたしている。この冷静さが story に客観性を，すなわち，説得力を与えている。Le Fanu の作品を二作選択した編者 Hill の意図もここにあると思われる。復讐のためでもなく約束を守るためでもなく，死の世界へと誘うために登場する ghost の存在には，誘われる側の生者の奇妙な諦観に裏打ちされた，現実感がたしかにある。

12. *The Story of the Inexperienced Ghost* by H. G. Wells (1866-1946)

復讐のために，あるいは約束をはたすために生の世界を訪れる ghost，死の世界への案内人として登場する ghost，運命を予知する ghost，生の世界の住人として暮らす ghost——さまざまな ghost が死と生の世界を結び付け，ghost と関わる人間の本質を見せてくれる。

The Story of the Inexperienced Ghost に登場する ghost は生前も死後もその存在が稀薄である。そして，今，彼は人間の世界にやっては来たものの，ghost の世界への帰り方がわからなくて困惑している。この「経験の

浅い」ghost に出会った若き英国紳士 Clayton は彼 (the ghost) についてこう語る。

> 'There he was, purposeless in life and purposeless out of it. . . . He had been too sensitive, too nervous ; none of them had ever valued him properly or understood him, he said. He had never had a real friend in the world, I think ; he had never had a success.'[17]

ガス爆発事故で死んだ不運な青年の ghost は Clayton の助けを借りて何とか, ghost の世界へと帰って行くが, 後日, ghost の手振りを真似, 同じ呪文をとなえた Clayton は複数の友人たちの目前で死者の世界へと旅立ってしまう。生の世界と死の世界とを結ぶ不可思議な通路の存在を疑い, 目的を持たない ghost を侮った Clayton への ghost の世界からの痛烈な反撃が無気味である。

13. *All Souls* by Edith Wharton (1862-1937)

この story で描かれているのは, All Souls' Day[18] に死者たちが集まる場所として我が家を選択された人の恐怖と苦悩であるが, Susan Hill が指摘しているとおり, story の舞台となっている屋敷 Whitegates が醸し出す atmosphere が story の主軸となっている。雪によって外界との接触を断たれた Whitegates——この沈黙する家敷の中で怪我のため動くことができない女主人 Sara Clayburn の合理的なものの考え方を打ち崩す出来事が起こる。長年, Whitegates の忠実な召し使いとして働いてきた Agnes が死者をこの世へと導く案内人となって屋敷を集合場所として ghost たちに提供していたのである。Sara が事の真相を知り Whitegates を逃げ出すのは丁度一年後の All Souls' Eve のことであるが, 彼女は二度と Whitegates には戻って行かない。屋敷は永久に ghost たちのこの生の世界での集合所となるのだろうか。

Susan Hill は, *Ghost Stories* の中で作品を, 他の多くの anthlogy のようにテーマ別や執筆年代順にではなく作家の名前の alphabetical order に

則して配列し，読者に ghost story が時間という枠を超えて提供するさまざまな局面の普遍性を伝えている。Hill が集めた作品をそれぞれ分析することによって彼女が考えている ghost story の本質を明確にすることができた。

> *Ghost stories tell us a great deal about ghosts, and about living human beings, too, and about the relationship between them, and between the seen and the unseen worlds, the real and the supernatural, as well as between good and evil. They tell us about things that lie hidden within all of us, and which lurk outside all around us.* They show human beings in the grip of the extremes of powerful emotions, at key moments and turning points in their lives.[19] (Italics mine)

Ghost Stories の序文として書かれたこの文章はそのまま *The Woman in Black* の紹介文となりうる。

II *The Woman in Black* written by Susan Hill

クリスマス・イヴ。家族は暖炉の前に集い，それぞれ順番に ghost story を語っている。Charles Dickens の世界を彷彿させる伝統的な設定である。しかし，この小説の語り手である“I”は妻や子供たちに執拗にせがまれても，クリスマス・イヴのこの楽しい団欒に加わることができない。妻の Esmé は無論のこと，彼女の連れ子たちを心から愛してはいても，そしてまた Monk's Piece での平和な生活に至極満足してはいても，“I”の心には暗い秘密がかくされており，それは誰にも語ることができない。“I”は，クリスマスが終ったら，その過去の秘密を書き留めておこうと決意する。

第一人称形式の物語はこうして始められる。“I”こと London の若き solicitor, Arthur Kipps は事務所所長 Mr Bentley の命により，87 歳の高齢で没した Alice Drablow の葬儀に事務所を代表して出席し，また彼女の残した書類を整理して必要なものを持ち返るため，Crythin Gifford の Eel Marsh House を訪れることになる。この屋敷と Crythin Gifford と

の間には沼地が広がり，引き潮の時だけ土手道を渡って屋敷まで行けるという具合になっていた。Alice Drablow は身寄りも親しい友人もなく，外の世界から遮断されたこの Eel Marsh House に長きにわたって一人で住んでいた。"The business was beginning to sound like something from *a Victorian novel*, with a reclusive old woman having hidden a lot of ancient documents somewhere in the depths of her cluttered house."[20] (Italics mine) 外部の人間との接触を断っていた Mrs Drablow と，外部の世界から孤絶していた Eel Marsh House とは，外界の時間の流れには身を任せずに，渦巻きはしても決して流れはしない濃密な時間の中に生き続けていた。語り手"I"がこの地を訪れるより 60 年前に (Victoria 朝時代に) 悲惨な事件が起こり，それ以降 ghost が Crythin Gifford に取り憑いていた。この ghost が日常の時間の流れをとどめ，人々の思いを過去へ，60 年前の出来事へと向けさせる。

Jennet Eliza Humfrye は私生児を出産する。Nathaniel と名付けられたその子供は姉 Mrs Drablow の息子として育てられるが彼が 6 歳の時，実の母親に引きとられることになる。Nathaniel が外出先が戻るのを待っていた母親の Jennet は Eel Marsh House の窓から，その最愛の息子を乗せた馬車が霧の中，道を誤って沼に吸い込まれるのを目撃する。Nathaniel は馬車に同乗していた乳母の Rose Judd, 御者，馬車を曳いていた馬とともに溺死してしまう。Jennet は狂い，消耗性の病に苦しむ。そして，息子を外出させた姉 Mrs Drablow を恨み，自らの運命を呪い，人間を憎悪して，事件の 12 年後にこの世を去る。しかし，Jennet の ghost は黒の喪服を身にまとって Crythin Gifford に現われ，その姿を誰かが目にすると，必ずや子供が死んでゆく。

語り手の"I"が，60 年前の事件の全容を知り，Crythin Gifford を去ってゆくまでの，Eel Marsh House における体験がこの ghost story の骨子である。"I", Arthur Kipps は黒衣の女，Jennet の ghost と出会い，marsh で溺れる子供の叫び声を聞き，Eel Marsh House の Nathaniel の nursery で rocking chair が揺れる音を耳にする。Ghost とその世界を，

視覚，聴覚，皮膚感覚を通して Arthur Kipps が体験してゆく過程を，抑制のきいた表現で Susan Hill は描出している。

Hill がこの ghost story において繰り返し描写しているのは "the woman in black" が内に秘めている憎しみの強さであり，その憎悪が波状的に伝える無気味な atmosphere である。

> . . . it (the expression on her face) was as though she were searching for something she wanted, needed—*must have*, more than life itself, and which had been taken from her. And, towards whoever had taken it she directed the *purest evil* and *hatred* and *loathing*, with all the force that was available to her.[21] (Italics mine except *must have*)

> It was true that the ghastly sounds I had heard through the fog had greatly upset me but far worse was what emanated from and surrounded these things and arose to unsteady me, *an atmosphere, a force*—I do not exactly know what to call it—*of evil and uncleanness, of terror and suffering, of malevolence and bitter anger.*[22] (Italics mine)

> But what I couldn't endure more was *the atmosphere surrounding the events : the sense of oppressive hatred and malevolence, of someone's evil and also of terrible grief and distress.*[23] (Italics mine)

読者の心に重苦しくのしかかってくるのはこの「悪意に満ちた」atmopshere だけではない。暗黒の底知れぬ迷宮へと引きずり込むような，激しい喪失感と孤独感が圧倒的な力で襲ってくる。

> But for the moment at least there was nothing here (the nursery) to frighten or harm me, there was only emptiness, an open door, a neatly-made bed and *a curious air of sadness, of something lost, missing, so that I myself felt a desolation, a grief in my own heart.*[24] (Italics mine)

I felt not fear, not horror, *but an overwhelming grief and sadness, a sense of loss and bereavement, a distress mingled with utter despair.*[25] (Italics mine)

"The woman in black" の沈黙と Eel Marsh House の静寂——これらの内にある悲しみと苦しさが大きな破壊力となって，Crythin Gifford の住民を，Arthur Kipps を，ひいては読者を揺さぶる。この静寂なる破壊力を Hill は understatement と repetition によって，重く伝えている。

美しく静かな自然。この自然界を秩序の世界とするならば，"the woman in black" の憎悪が渦巻く Eel Marsh House は全くの混沌の世界である。この対照的な現実を直接に体験することによって Arthur Kipps は成長してゆく。自信に満ちた合理的な現代青年は，理性と知識では理解しえない世界を知って，自らの "reality" を疑うようになる。"But what *was* 'real'?" 一体，何が現実なのか。何が真実なのか。そして彼は，"the woman in black" に象徴される悪の世界を知ったがゆえに，神によって支配される善の世界が相対的に存在するに違いないということを悟る。"Now, I realised that there were forces for good and those for evil doing battle together and that a man might range himself on one side or the other."[26]

The Woman in Black は Arthur Kipps の精神的成長を描く Bildungsroman でもあるのだ。

ここで Susan Hill の ghost story 論に立ち帰ってみたい。Ghost story とは，ghost と人間とを語り，そしてまた両者の関係をも語り，見えるものと見えざるもの，現実のものと現実を超越したもの，善と悪との関係をも物語る。我々の内にひそむもの，我々の外にあるものを描いてみせる。そして，その描き方としては understatement が必要である。またなによりも atmosphere が読者に伝わらねばならない。*The Woman in Black* は手法においても内容においても Susan Hill が理想とした ghost story の特質を全て持ち合わせている。彼女は，自らが復活させたいと願っている Victorian ghost story の世界を，Victoria 朝時代に背景を持つ事件を

現代と結びつけて描くことによって，鮮やかに創り出した。*The Woman in Black* は，まさしく，*Victorian* "traditional, classic ghost story" である。

多くの ghost story が short story であるにもかかわらず，Susan Hill は 'full-length novel' の ghost story を書くことによって atmosphere を持続させる方法としては understatement だけではなく，repetition もまた効果的であることを示した。繰り返し描写される "the woman in black" の憎悪と悲哀は通奏低音となって読者の心に沈澱し，そのため，彼女の怨念が創り出す atmosphere は我々読者の内部にこびりついてしまう。

Arthur Kipps は London へ戻り，かねてからの婚約者 Stella と結婚する。二人の間に生まれた息子，Joseph Arthur Samuel がおぼつかない足どりでよちよち歩きを始めた夏のある日曜日の午後，親子三人は公園を訪れる。妻と息子がポニーが曳く馬車に乗って楽しんでいるのを見ていた Arthur の眼があの女を，"the woman in black" をとらえる。

> I looked directly at her and she at me. There was no mistake. My eyes were not deceiving me. It was she, the woman in black with the wasted face, the ghost of Jennet Humfrye.... There was no expression on her face and yet I felt all over again *the renewed power emanating from her, the malevolence and hatred and passionate bitterness.* It pierced me through.[27] (Italics mine)

ポニーは暴走し，馬車から投げ出された幼い息子は即死する。重傷を負った Stella も 10 ヶ月に息を引きとる。"I had seen the ghost of Jennet Humfrye and she had had her revenge." Arthur の手記はここで終る。"The woman in black" は，時間ばかりではなく空間をも超えてその悪意と憎悪が顕在することを教えている。Jennet Humfrye の ghost は今なお，悲しみと敵意を内に抱いたまま，自らの運命を嘆き続けているのだろうか。

注

1) Susan Hill, 'Writing a Book', in *The Lighting of the Lamps*, London: Hamish Hamilton, 1987, p. 202.
2) Michael Cox & R. A. Gilbert, 'Introduction', in *The Oxford Book of English Ghost Stories*, Oxford: Oxford University Press, 1986, p. xiv.
3) *Ghost Stories*, selected by Susan Hill, London: Hamish Hamilton, 1983, p. 10.
4) J. A. Cuddon は *The Penguin Book of Ghost Stories*, Harmondsworth: Penguin Books, 1984. を編集している。
5) *Ghost Stories*, p. 13.
6) *Lost Souls, A Collection of English Ghost Stories*, edited by Jack Sullivan, Ohio: Ohio University Press, 1983, pp. 1-12. を参照されたい。
7) Daphne du Maurier, Kingsley Amis, Penelope Dively, Leon Garfield を評価している。*Ghost Stories*, p. 13.
8) *Ghost Stories*, p. 15.
9) *Ibid.*, p. 32.
10) *Ibid.*, p. 34.
11) *Ibid.*, p. 40.
12) *Ibid.*, p. 90.
13) *Ibid.*, p. 130.
14) Mrs Marden と語り手 "I" は, Sir Edmund Orme の ghost を, "perfect presence" と呼んでいる。
15) *Ghost Stories*, p. 112.
16) *Ibid.*, p. 176.
17) *Ibid.*, p. 225.
18) 諸死者の記念日，諸魂日，(俗に)万霊節。《11 月 2 日；All Saints' Day の翌日》
19) *Ghost Stories*, p. 15.
20) Susan Hill, *The Woman in Black*, London: Hamish Hamilton, 1983, pp. 23-24.
21) *Ibid.*, p. 61.
22) *Ibid.*, p. 82.
23) *Ibid.*, p. 135.
24) *Ibid.*, p. 119.
25) *Ibid.*, p. 125.
26) *Ibid.*, pp. 149-150.
27) *Ibid.*, p. 159.